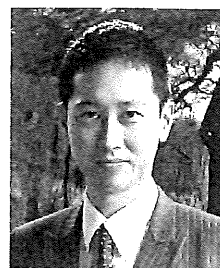


《巻頭言》

政治家の評価 — 将来を見据えた決断 —



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

巨魁、妖怪、黒幕、国粹主義者、保守反動の権化……。そのニックネームは数知れない。元首相の岸信介のことである。

1981年6月に文藝春秋から出版された『岸信介の回想』という分厚い証言録がある。日本近現代史研究の泰斗で知られる伊藤隆が、岸本人と、そのブレーンで政治運動家の矢次一夫を相手にして行った合計24回にも及ぶロングインタビューを1冊にしたものである。

何度も何度も飽きずに読み返している。岸が亡くなる6年前に刊行されたものだが、その波乱万丈、紆余曲折の生涯は、戦前、戦中、戦後日本政治史と軌を一にしており、驚くべきエピソードが満載で実に面白い。

首相在任中の岸が真骨頂を發揮したのは、何と言っても日米安保条約改定であろう。従来の日米安保条約は、まさに支配者と被支配者、後見人と被後見人、保護者と被保護者のような印象を受ける内容だった。「自主独立の完成」を使命とする岸は、その片務性、不平等性を是正するため、改定に向け全力を傾注する。

しかし、世間の風当たりは厳しく、全国で「安保反対」の声が渦巻いた。朝鮮戦争の記憶も新しい中、改定によって日本もアメリカの仕組んだ戦争に巻き込まれる危険があるという「巻き込まれ論」が独り歩きした。国会議事堂の周囲は連日のように反対派で埋め尽くされ、渋谷区南平台町にある岸の私邸まで取り囲まれた。

このままでは岸の命も危ない。首相官邸の安全確保に自信が持てなくなった警視總監の小倉謙は岸に別の場所に移るよう要請した。だが、岸は「全力を尽くしても、何か起ればそれはやむを得ないんだ」と答え、最後まで怯むことはなかった。

1960年6月19日午前零時、新日米安保条約は自然承認となる。その数日後、岸は騒動の責任を取る形で首相の職を辞した。

首相官邸を去る時、岸は中国の歴史書『晋書』に出てくる「棺を蓋いて事定まる」という言葉を漏らしたとのエピソードが残っている。その人の評価は死後に定まるという意味である。

これは岸の捨て台詞ではない。偽らざる本音だったのではないか。自信と誇りが漲っている。

あれから半世紀以上が過ぎた。今や日米安保条約改定を論難する人はいない。

政治家の評価は難しい。しかし、少なくとも「今」の評価だけを気にして、世論に追従し右顧左眄するような政治家は後世に名を残すことはできまい。例え「今」の国民から反発を食らおうとも、次代、次々代のために斃れて後已む政治家こそが本物と言えよう。

革新勢力から「戦争法」と揶揄される集団的自衛権の行使容認を柱とした平和安全法制、「平成の治安維持法」とまで酷評されるテロ等準備罪……。半世紀後の日本人は岸の外孫に対して、どんな評価を下すのだろうか。